

機関番号：12701

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21830040

研究課題名（和文） 国際バカロレアMYP美術科カリキュラムの実践研究－国際交流を中心に－

研究課題名（英文） A Study of the Art curriculum Based on the International  
Baccalaureate (IB) Middle Years Programme (MYP)  
－Centering Around International Exchange－

研究代表者

小池 研二 (KOIKE KENNJI)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：90528382

研究成果の概要（和文）：

本研究は国際バカロレア（IB）中等課程（MYP）の教育理念やシステムを明らかにし、我が国の美術教育に対する効果について調査したものである。その結果①実社会を意識した学習やワークブックの活用など MYP は我が国の美術教育に有効な点を複数持っていること。②多文化理解やコミュニケーションにおいて美術教育の有効性が見られたこと、③美術館等との連携をする上でも MYP の考え方が有効なこと。等が調査により見ることができたが、これらは今後とも研究する必要がある。

研究成果の概要（英文）：

This study clarified the educational philosophy and the system at International Baccalaureate (IB) Middle Years Programme (MYP), and this was an investigation of the effect on the education of the art of Japan. I was able to obtain the following results. 1: MYP has some effective respects in the education of the art of Japan for example study connected directly with the world, use of workbook. 2: intercultural awareness and communication are effective for the education of the art of Japan. 3: The idea of MYP is effective to cooperate with museums. It will be necessary to research these in the future.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	840,000	252,000	1,092,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,740,000	522,000	2,262,000

研究分野：教科教育学

科研費の分科・細目：社会科学・教科教育学

キーワード：美術教育，国際バカロレア，国際交流授業，美術館・博物館教育，多文化理解

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 国際バカロレア（以下 IB）の中等課程プログラム（以下 MYP）に関する研究は、我が国ではこれまでほとんど行われていなかった。これは大学入学資格課程（ディプロマ

プログラム）からスタートした IB の歴史から見れば当然といえる。中等美術教育においても、先行研究はほとんど行われていない状況であった。しかし、独自の教育理念を持つ MYP は、授業時数の削減やそれに伴う教員

数の減少、教科の存在意義等さまざまな問題を抱えている我が国の中学校美術教育にも有効な点があると考えた。

(2) 研究者は平成 19 年度まで東京学芸大学附属国際中等教育学校に勤務しており、そこで MYP のカリキュラム導入に向けての研究を行ってきた。同校は現在 IB 認定校になり MYP による授業を実施している。本研究では同校の授業を通じた実践研究を実施することにより、プログラムの具体的な分析をしようと試みた。

(3) 東京学芸大学附属国際中等教育学校では美術科を中心に米国ニューヨーク州ベツレヘム中央中学校と交流活動を行ってきた。これは、①コミュニケーションの重視、②ホリスティックな学習、③多文化理解を基本概念としている MYP の考え方に則って行っているものである。本研究ではこの活動を調査することにより MYP から見た美術教育の可能性を探ることをめざした。

(4) 現在、我が国の美術教育では鑑賞教育について多くの議論がなされている。学校現場においても、新学習指導要領で鑑賞は重視され、美術館等社会教育施設の活用が記されている。MYP の面から美術館等との連携を考えることにより、学校と美術館との新しい連携のあり方が見えてくるのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

(1) IB・MYP の実態を知る。

MYP の基本概念

- ①コミュニケーションの重視
- ②ホリスティックな学習
- ③多文化理解

を踏まえた美術教育のカリキュラムについて、カリキュラムの原理、実施校の運用の実態、工夫点、問題点を明らかにし、我が国の美術教育に対して、MYP にはいかなる有効な点があるのかを明らかにし、あるとすればどのように我が国の美術教育に生かすことができるのかを検証する。

(2)MYP 美術科の特色を知る。

MYP 美術科の授業ではいわゆる完成作品だけで評価するのではなく、研究の導入、思考段階、さらには完成後の評価といった全ての段階を重視している。各学習の導入段階では内容に対する問題提起を教師側が行い、生徒は学習を身近なものとする。また、学習の各段階において、学習進歩ワークブックと呼ばれるスケッチブックを活用し評価に生かしている。本研究ではこのような MYP の学習活動の効果について検証していく。ワー

クブックについては横浜国立大学附属鎌倉中学校で実践研究を行う。

(3)多文化理解やコミュニケーションについて美術の役割を探る。

海外との交流学习について研究することにより、美術教育の可能性を探る。言語を介在しない視覚芸術である美術は国際理解に大きな可能性を持っている。本研究では東京学芸大学附属国際中等教育学校での実践研究を通してデータ収集を行い今後の研究につなげていく。

(4)美術館等の社会教育施設との連携を考える。

MYP では教科を超えたホリスティックな学習を基本概念においている。この考えから、様々な教科や美術館等学校以外野施設と連携する美術教育の効果を検証研究する。

## 3. 研究の方法

(1)IB・MYP の実態把握については IB 機構が発行している公式ガイドブック等の文献および、公式サイトを分析した。また、認定校である東京学芸大学附属国際中等教育学校のコーディネーターに口頭によるインタビューを行い、疑問点等を明らかにした。

(2)MYP 美術科の特色を調査するために東京学芸大学附属国際中等教育学校で調査研究を行った。同校とニューヨーク州ベツレヘム中央中学校との国際交流授業の実践研究を行った。それぞれ、現地調査、生徒からのアンケート等を行った。

横浜国立大学附属鎌倉中学校ではワークブックを活用した実践研究を開始した。ワークブックは我が国の授業に最大限の効果が出るようにその使用法も含めて目下研究中である。

美術科の授業の実態を知るために日本及び海外の IB 認定校を訪問して調査した。訪問先では授業参観、ワークブックの閲覧、生徒や教師に対するインタビュー、授業で配布する資料の分析等である。訪問した学校は

①日本

- ・加藤学園暁秀高等学校・中学校
- ・横浜インターナショナルスクール (ディプロマ卒業制作展のみ)

②イギリス

- ・ノースロンドンインターナショナルスクール

③フランス

- ・パリインターナショナルスクール

(3)ベツレヘム中央中学校との交流授業は、ビ

デオレーターによる交流活動，日米双方での作品展といった具体的な活動を行いながらデータの収集を行った。データは生徒及び教員に対するアンケートによるものである。アンケート項目は日米双方同一のものとした。

(4)米国，英国，フランスの先進的な鑑賞活動を行っている美術館・博物館について現地調査をした。調査方法は美術館教育担当者に対する口頭でのインタビュー，ガイドツアー等の鑑賞活動への参加及び見学，発行している書籍及びWEBサイトの分析等である。調査した施設は以下の通りである。

①米国

- ・ニューヨーク州エンパイアステートアートプラザ
- ・ニューヨーク州立博物館
- ・ソロモン・R・グッゲンハイム美術館
- ・ニューヨーク近代美術館
- ・ボストン美術館

②英国

- ・テート・モダン
- ・ナショナルギャラリー（ロンドン）

③仏国

- ・ルーヴル美術館

4. 研究成果

今回の研究では(1)から(4)のそれぞれの研究目的に対して以下の通りの成果を見ることができた。

(1)IB・MYPの実態調査

IB・MYPは教科の目標と評価規準が直結しており具体的である。美術科では以下の4つの目標を設けている。

- A：知識と理解(Knowledge and understanding)，
- B：応用(Application)，
- C：ふり返りと評価(Reflection and evaluation)，
- D：個人的な関与(Personal engagement)

である。A～Dの各目標は教科を学習した結果，何を生徒が成し遂げられるかが具体的に示されている。

A：では，美術に対する知識の構築や美術の表現形式及び美術のプロセスの理解に焦点を当てている。

B：では，創作活動での技術の実践的な応用に焦点を当てている。生徒の技術的な応用力に焦点を当てた目標である。

C：では，生徒に批評的，客観的な振り替りを求めている。

D：では，学習に対する基本的な態度の発達である。このような目標が直接評価規準になっている。IBは国際的な統一資格であるため資格の認定に直接関係する評価のシステムを細かく決めて公表している。評価規準はルーブリックとして規定されている。

本研究ではMYPの評価規準と我が国の4観点による評価を比較した。

分類	美術科の4観点	4つの評価規準
ア	I 美術への関心・意欲・態度	D：個人的な関与
イ	II 発想や構想の能力	不一致
	不一致	C：ふり返りと評価
ウ	III 創造的な技能 可能性有	B：応用 可能性有
エ	IV 鑑賞の能力 一部	A：知識と理解

図1 我が国の4観点とMYPの評価規準

(5. 主な発表論文等① より)

この表の通り，我が国とMYPの評価のポイントが近いところが多いが，「ふり返りと評価」の項目にMYPの独自の視点があることがわかった。また，教科目標や評価規準から，学習すべき内容に対しリスクを顧みずに探求するなどの「MYP美術科の育てたい生徒像」が見えてきた。MYPから見た美術教育の可能性については，今後も研究していく必要がある。

(2) MYP美術科の特色の調査

美術科のカリキュラムでは，「単元クエスチョン」から学習を始めるのが大きな特色と考えられる。MYPの学習は，言うなれば生徒の側からスタートする。教師がむやみに課題を与えるのではなく，この課題は自分たちの生活とどのように関わるのかを生徒が考えるところから学習がスタートする。美術は自分たちの生活と密接に関わっており，重要な教科なのであるということを生徒は常に考えている。このことは我が国の美術教育についても大変重要なポイントであると考えられる。

今研究では学習進歩ワークブックについていくつかの実例を見ながら調査をした。学習進歩ワークブックは学習活動の動機，学習に関連する歴史的文化的な資料，生徒の個人的状況からの発想，制作の最初や途中段階でのアイデアおよびエスキース，完成作品についての写真等の資料，生徒自身によるふり返り等，学習活動における様々な段階が記録されている。MYPでは，学習進歩ワークブックを使い学習の途中の段階も積極的に評価していくのである。美術科の授業で大きな位置を占める学習進歩ワークブックは，生徒の活動を評価する上で非常に重要な位置を占めている。完成作品のみではなく授業の各段階を見取るとは美術科では特に重要である。これらのことを考えて学習進歩ワークブックを我が国の美術科の授業に導入することは，発想構想面を評価するという現在の学習指導要領の趣旨からいっても意味がある。ただし，そのまま導入しても教育の内容が違うため，うまくいくことは難しい。我が国の実情

に合わせて、改良することは必要である。

このような中で現在、横浜国立大学附属鎌倉中学校の協力を得て「発想ノート」という形の実践研究を行っている。学習進歩ワークブックの活用については活動全般にわたる評価の方法として期待できるものがあるという指摘もあり今後研究を続けていく必要がある。

### (3) 多文化理解やコミュニケーションについて美術の役割

東京学芸大学附属国際中等教育学校とニューヨーク州ベツレヘム中央中学校との国際交流授業の実践研究ではアンケート等により以下のことが明らかになった。

第1に授業への関心や問題意識が高まること。相手に見せるということまで真剣に制作に取り組むことができたという生徒がアンケートでは特に日本側に多くみられた。米国側では、相手に見せるためにがんばると言うより、相手に見せることにより自分たちの作品にフィードバックを得られる等、制作後の効果をあげる生徒がいた。自国の文化や相手の文化を知りそれぞれの価値を認め合うことはこれからの社会に不可欠である。その意味でも今回のような国際交流活動は意味のあるものであった。

美術は交流活動に適しているという生徒の回答にもあるように美術は国際理解という意味でも非常に重要であると言える。

さらに美術だけでなく、美術と他教科、例えば社会科等の教科、またはいろいろな領域が協力して授業を行っていくことが考えられる。このときも美術は造形という効果的な要素を持っており有効に作用すると考えられる。国際交流活動は今後ますます必要性が増すと思われる。そのことから MYP の考え方は十分研究の価値がある。

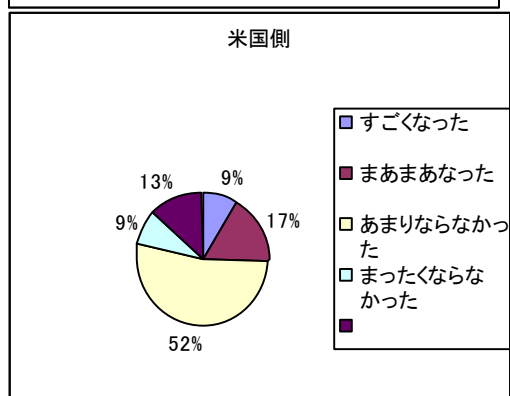
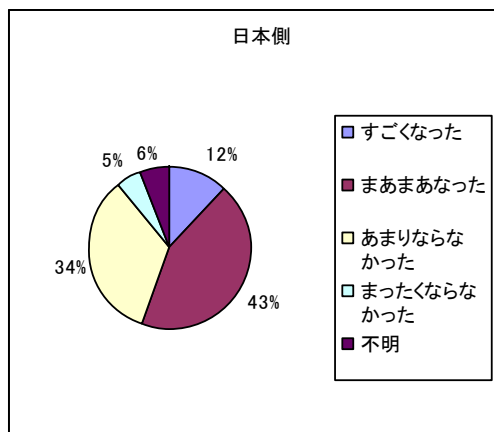


図2 『日米交流授業生徒アンケート 交流学习をしたことで自国だけでなく世界のことについて以前より考えるようになりましたか。』本アンケートは授業後に日米双方で同じ質問で実施した。質問は11項目で数値を統計化したものは8項目でありここに挙げるのはそのうちの1つである。

### (4) 美術館等の社会教育施設との連携

①ニューヨーク州エンパイアステートアートプラザ、グッゲンハイム美術館、ボストン美術館について以下のことが調査の結果明らかになった。また、結果については学会発表、論文発表を行い興味ある内容も複数あると評価を受けた。

1つめはいずれの施設も美術の授業という枠にとらわれていないということである。鑑賞活動に対して単に美術といった方向からだけでなく、鑑賞を通しての教育というスタンスに立ってより広い視野から活動を捉えている。

2つめは学校を始めとする美術館の外の組織との連携を着実にやっていることである。美術館で入館者を待っているだけでなく、ガイドツアー、アウトリーチプログラム、鑑賞教材等さまざまな方法で学校等との関係を構築していた。

3つめは鑑賞活動に興味関心を持たせることを重視している。意欲的、積極的に作品と対峙することの大切さをどこの施設でも

強調していた。

②英国及びフランスの美術館について  
英国テート・モダン及び仏国ルーヴル美術館ともに鑑賞教育については重視していた。英国では特にアーティストとの連携で美術館と学校との交流活動を実施しておりアウトリーチプログラムも充実していた。また、美術以外の教師が活用することもあるとのことであった。

ルーヴル美術館でも多くの学校がパートナーとなりルーヴル美術館を活用しているとのことであった。これは「諸芸術の歴史」という教科が必修となったことも影響している。

以上のように調査した美術館では学校教育との連携を重視している。また、これらの連携は MYP の概念であるホリスティックな学習とも通じるものが大いにあった。

美術館等の社会教育施設と学校との連携についての調査は開始した段階である。これらに関しては今後も調査研究を続けていく必要がある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ①小池研二, 国際バカロレア中等課程プログラム (MYP) 芸術科についての基礎的研究 (2) - 評価を中心として-, 美術科教育学会誌「美術教育学」, 査読有, 32 号, 2011, pp.149~162
- ②小池研二, 米国の 3 つの美術館等における鑑賞教育について-国際バカロレア中等課程プログラムの考え方からみた鑑賞教育-, 大学美術教育学会誌, 査読有, 43 号, 2011, pp.119~126

[学会発表] (計 2 件)

- ①小池研二, 嶽里永子, 国際バカロレア中等課程プログラムに基づいた授業実践研究-日米交流授業を中心として-, 第 33 回美術科教育学会, 2011 年 3 月 27 日, 富山大学
- ②小池研二, 米国エンパイアステートプラザアートコレクション等における鑑賞教育-国際バカロレア中等課程プログラムの考え方から見た鑑賞教育について-, 第 49 回大学美術教育学会, 2010 年 9 月 19 日, 武蔵野美術大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小池 研二 (KOIKE KENJI)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授  
研究者番号：90528382